

研 究 分 野	増養殖技術	機関・部	水産総合研究所・ほたて貝部
研 究 事 業 名	良質大型活ほたてがい生産拡大事業(大型活ホタテガイ生産手法の実証・普及)		
予 算 区 分	研究費交付金(青森県)		
研 究 実 施 期 間	H20～H21		
担 当 者	吉田 達		
協 力 ・ 分 担 関 係			

#### 〈目的〉

付加価値の高い良質大型活ホタテガイの効率的な生産手法を確立し、養殖マニュアルを作成する。

#### 〈試験研究方法〉

##### 1 平成21年産貝

成長促進区として平成21年6月15日に目合1分のパールネット200個体/段で採取した稚貝を、平成21年7月28日に目合1.5分のパールネットに30個体/段、15個体/段に分散した他、従来区として平成21年7月28日に目合1.5分のパールネットに50個体/段で稚貝採取した。それぞれ平成21年9月30日に回収して、生貝数、死貝数、殻長を測定し、成長と生残率を比較した。

##### 2 平成20年産貝

成長促進区として平成21年3月18日に①目合7分の丸籠に10個体/段収容、②目合7分の丸籠に6個体/段収容、③目合4分のパールネットに4個体/段収容、④アゲピンによる50段×2個体の耳吊りした、4試験区を設定した他、従来区として6月17日に目合7分の丸籠に10個体/段収容した。平成21年10月10日に付着物除去のための籠交換を行った際に、生貝数、死貝数を計数するとともに、生貝30個体の殻長、全重量、軟体部重量、異常貝数を測定し、成長や生残率等を比較した。

#### 〈結果の概要・要約〉

##### 1 平成21年産貝

平成21年7月28日における成長促進区の稚貝の平均殻長は14.1mmで、従来区の稚貝の平均殻長10.7mmよりも有意に大きかったことから、大型稚貝を得るためには6月の付着稚貝間引き時に1分パールネットへ仮採苗することが有効であると考えられた(図1)。

また、平成21年9月30日における成長促進区の稚貝の平均殻長は30個体/段が37.8mm、15個体/段が37.7mmで、いずれも従来区の稚貝の平均殻長32.2mmよりも有意に大きかった。30個体/段と15個体/段で差が見られなかったことから、7月分散時の適正収容密度は30個体/段と考えられた(図2)。

##### 2 平成20年産貝

平成21年9月30日における成長促進区の平均全重量は125～135gで、従来区の116gよりも有意に大きかった(図3)。また、可食部として重要な軟体部重量も成長促進区は46.1～54.0g/個体で、従来区の43.7g/個体よりも有意に大きかった。中でも、パールネットに1段当り4個体ずつ収容したホタテガイの軟体部重量が最も大きかったことから、大型活ホタテガイ作りには同手法が最も有効であると考えられた(図4)。

〈主要成果の具体的なデータ〉

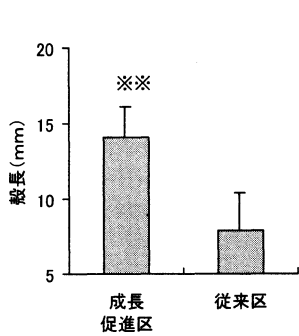


図1 平成21年7月28日における稚貝の殻長(バーは標準偏差、\*\*はP<0.01で有意差あり)

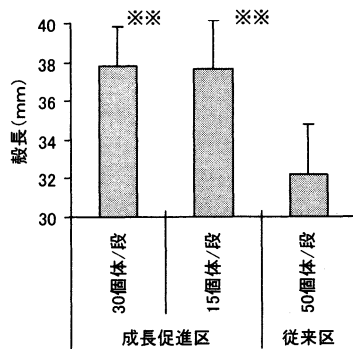


図2 平成21年9月30日における稚貝の殻長(バーは標準偏差、\*\*はP<0.01で有意差あり)

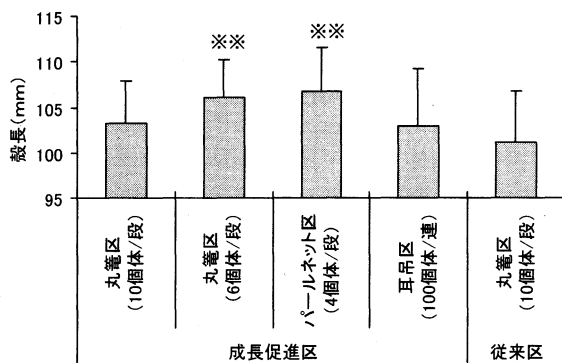


図3 平成21年9月30日におけるホタテガイの全重量(バーは標準偏差、従来区と比べた場合、\*\*はP<0.01で、\*はP<0.05で有意差あり)

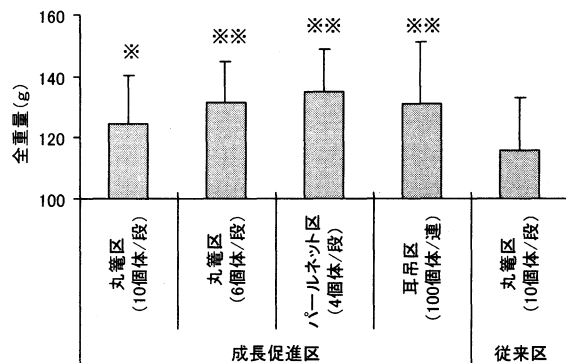


図4 平成21年9月30日におけるホタテガイの軟体部重量(バーは標準偏差、従来区と比べた場合、\*\*はP<0.01で、\*はP<0.05で有意差あり)

〈今後の問題点〉

平成20年産貝、平成21年産貝とも平成22年2月に回収して、成長促進区と従来区の成長・生残率を比較することとしており、その結果をもとに大型活ホタテガイの効率的な生産工程を取りまとめる必要がある。

〈次年度の具体的計画〉

なし

〈結果の発表・活用状況等〉

平成8年度に発行した「ほたて養殖ごよみ」に、大型活ホタテガイの効率的な生産工程を盛り込むことにより改定版を作成し、ホタテガイ養殖業者へ配布する予定。